

川辺氏列伝

忠義と武勇、一族の軌跡

序章 川辺氏の興り

平安中期、陸奥の地に川辺氏あり。

初代・川辺義孝は、前九年の役（永承六年・一〇五一年）の以前より、出羽国・飽田城（あきたじょう）近郊の岩見沢に陣を構え、危機に瀕した飽田城を救済した。さらに岩見沢一帯を鎮圧・制圧し、その地を川辺郡（現・秋田市河辺）と定めた。これが川辺氏の名が地に刻まれた始まりである。

義孝の妻は藤原経清（つねきよ）の姉妹であり、経清は後の平泉藤原氏の祖・藤原清衡（きよひら）の父にあたる。川辺氏には藤原の血も流れていた。



秋田城跡（飽田城・現秋田市）川辺義孝が救済した古代城柵の跡

第一章 安倍頼時との盟約

前九年の役において、四代・川辺孝幸は安倍頼時（初名・頼良）が率いる軍の重臣として、数々の武功を立てた。その働きは現代に例えるならばMVPと称すべきものであり、頼時の子・安倍貞任より、家紋（丸に菱木瓜）の入った兜と胴丸を賜った。これは頼時が貞任に預けていた品であり、川辺氏への深い信頼と敬意の証であった。

しかし康平二年（一〇五七年）、悲劇が訪れる。安倍頼時は、同族でありながら内源氏の謀略に乗じた安倍富忠の軍に襲撃され、矢を受けて翌日、帰らぬ人となった。孝幸はその死を深く嘆き悲しんだ。



（左）川辺氏家紋「丸に菱木瓜」（右）川辺氏に伝わる兜 家紋が刻まれている

第二章 仇討ち 安倍富忠討伐

主君の無念を胸に、孝幸は単身、決意を固めた。

彼は号泣しながら、毘沙門天神楽に用いる神面を顔に付け、富忠が陣を構える猿ヶ石川（現・遠野市宮守付近）へと単独で侵入した。そして家臣三百六十人および富忠を斬り、ついに主君の仇を討った。富忠の首は鳥海柵（現・金ヶ崎町西根鳥海）の安倍宗任の陣へと持ち帰られ、宗任をはじめとする安倍一族は、川辺氏の忠節と武勇を口々に称えたという。

この功績をもって、孝幸は「日高見太夫太郎孝幸」と号するようになった。



国指定史跡 鳥海柵跡（岩手県金ケ崎町） 奥六郡の主、安倍一族の拠点 孝幸が富忠の首を持ち帰った安倍宗任の陣

第三章 役の終結と岩見沢への移住

康平五年（一〇六二年）、安倍氏は源氏によって滅ぼされた。安倍宗任は愛媛へ流配の後、九州へ送られ、その子孫は山口まで辿り着いたと伝わる。

川辺氏は安倍氏にのみ忠誠を誓っていたため、安倍氏滅亡後はいかなる勢力の傘下にも入ることを潔しとしなかった。やがて川辺一族の多くは、秋田岩見沢湊安東領へと移住した。これは、南部武田陸奥守によって和賀の知行を取り潰されたためであったという。ただし宗家は、和賀の地に留まり続けた。



秋田岩見沢湊安東領域 秋田市河辺市民センター岩見三内連絡所付近 川辺一族が移住した地

第四章 石塔山への遺骨移送

前九年の役の終結後、孝幸は和賀の金山奉行を任された。このとき彼は「日高見太夫」と名を変えていたため、政府側もその正体を知ることがなかったという。

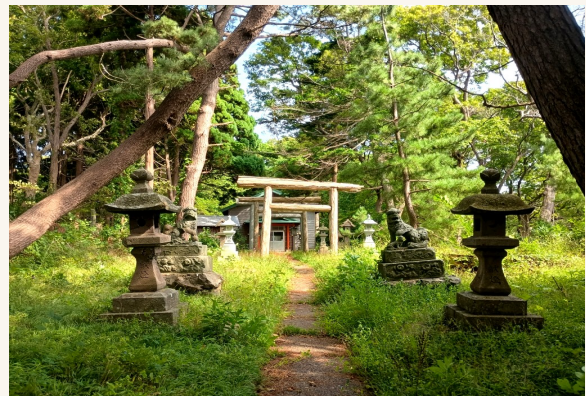
孝幸は一〇七五年以降、三年ごとに十三湊（青森県十三湖付近）を訪ねていた。遠く北の湊に立ち寄りながら、主君への誓いを胸に旅を続けた孝幸の姿が偲ばれる。

孝幸はまた、仮埋葬されていた安倍頼時の遺骨を、石塔山荒覇吐神社（大山祇神社・現・五所川原市）へと移送した。これは主君への最後の奉公であり、孝幸の深い敬愛と忠義の証であった。鳥居には菊の御紋が刻まれており、その由来は今もなお謎に包まれている。

孝幸の遺骨は、和賀と五所川原に分骨されたと伝えられている。主君の魂を守った忠臣は、その生涯を終えた後もなお、二つの地で静かに眠り続けている。



十三湊遺跡（青森県五所川原市・十三湖付近）孝幸が三年ごとに訪れた中世国際港湾都市の跡



（左）石塔山大山祇神社 参道前（右）石塔山荒覇吐神社 安倍頼時の遺骨が移された安倍氏の聖地（現・五所川原市）



石塔山大山祇神社 鳥居に刻まれた菊の御紋 その由来は今もお謎に包まれている

本伝は「川辺物語（二〇二五年九月十七日記）」をもとに編纂した。

令和七年（二〇二五年）川辺氏縁者記

附録 縁者たちの集い



昭和六十三年（一九八八年）五月 石塔山荒覇吐神社前にて川辺姓の方々による集合写真。
前九年の役より九百余年の時を経て、なお、ご先祖の地に集うその姿に、
川辺氏の誇りと絆は今も脈々と受け継がれている。

本伝は「川辺物語（二〇二五年九月十七日記）」をもとに編纂した。

令和七年（二〇二五年）川辺氏縁者記